

平成29年度第1回宮城県試験研究機関評価委員会  
林業関係試験研究機関評価部会議事録

日時：平成29年8月21日（月）  
午後1時30分～午後3時30分  
場所：林業技術総合センター  
林業研修館大講堂

1 委員出席者

所属・役職	委員名	摘要
国立大学法人東北大学大学院農学研究科 准教授	陶山 佳久	部会長
尚絅学院大学 環境構想学科 准教授	鳥羽 妙	副部会長
株式会社サカモト 代表取締役社長	大沼 毅彦	
一般社団法人BAKKE	浦田 紗智	

2 宮城県林業技術総合センター関係出席者

所長 松野 茂，副参事兼次長（総括） 加藤 幸弘，  
企画管理部長 齋藤 和彦，地域支援部長 皆川 隆一，環境資源部長 三浦 孝則，  
普及指導チーム技術副参事 眞田 廣樹，担当研究員ほか

3 議題及び議事録

(1) 開会（加藤次長（総括））

- ・資料の確認・日程の説明を行った。
- ・情報公開条例に則して、公開となっている旨を報告した。
- ・委員4名全員の出席を確認した。

(2) 所長あいさつ（松野所長）

本日は本年度第1回目の評価委員会ということで、お盆明けのなにかと忙しい中、陶山部会長をはじめ委員の先生方には御出席いただきましてありがとうございます。心より感謝を申し上げます。また、委員の皆様には一連の業務評価のみならず、当センターの日頃の運営に対しまして、格別の御支援、御指導をいただいておりますことに重ねて感謝を申し上げます。私4月に当センターに参りました松野と申します。センター勤務は4回目になります。この試験研究に対する評価制度が始まった時から、大沼先生をはじめとする歴代の先生方から御指導いただいていたわけですが、この立場になりまして、これまで多々いただいたアドバイス、御提言を顧みさせていただくと改めて委員の皆様には大きな感謝と御礼を申し上げる次第です。

さて、本センターの業務につきましては、依然として試験研究、普及指導ともに震災復興関連の業務が相当程度を占めている訳ですが、先の震災から6年が経過しまして今後は復興が成った後の、あるいは本来の森林・林業、木材産業に関する基礎研究、実用研究への対応が必要と考えておりますし、そのための準備もしっかり進めていく必要があると考えております。

折しも、5月に閣議決定なされました森林・林業白書ですが、その中では今後の政策の大きな方向性として林業の成長産業化に向けた新たな技術の導入が強調されています。例えば木材流通におきますICTの活用、次世代エリートツリーの開発、早生樹の導入、あるいは新たな木質耐火資材、CLT工法の開発などなど、いわゆる林業を進化させる最新技術にスポットがあてられております。そして、その技術導入を進めていく上での条件整備として、国あるいは県の研究・研修機関、これらの体制強化、それから大学などとの連携、そして普及指導事業

の活用が挙げられておりますので、おそらくは今後、こういったものを促進していく上で試験研究、あるいは普及指導に対する支援が重点的になされていくのではないかと期待もしているところ です。

いずれ我々としましては、人材、設備、施設、そして研究資金、いわゆる研究資源というものにつきましては、諸先生御理解いただいているとおおり、決して必要十分という状況にはないわけですが、もとより我々、公設の試験研究機関ですので、県民の皆さん、あるいは林家、農家の皆さん、そして企業、関係業界などの多様なユーザーニーズに適切に対応していく行政サービス機関としての役割、これを強く意識しながら、しっかりと対応していきたいと考えておりますので、委員の先生方には、引き続き一層の御支援と御理解を賜りますようお願い申し上げます。冒頭の挨拶とさせていただきます。本日は重点的研究課題1 課題についての中間評価をいただきながら、内部評価結果ですとか、これまでに挙げられている課題化要望に対する調整結果について御報告をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。

### (3) 部会長あいさつ（陶山部会長）

私たち、この評価委員で受け持っているのは3年になろうかと思ひます。その間に何人かの方は入れ替わっていると思ひますのでまた改めて簡単に御挨拶させていただきたいとおもひます。あの、当初から、私が引き受けたときからずっと言っていることなんですけど、形式的な評価をするつもりは全くないと、本当に実になることをしたいと思ひています。それは今でも同じですので、ともすると評価される側からすると面倒くさいと思われるかもしれないんですけども、ま、形式的にやられたほうが簡単なと思うかもしれないんですけども、どうかそこは御勘弁ください。その、勿論まったく悪気があってやっていることじゃないですし、本当に心の底から少しでもお役に立てればと思ひていますし、このセンターあるいは県民、あるいは研究者それぞれの方々にもお役に立てればという気持ちそのままやっていきますので、どうか御勘弁ください。で、多少厳しい表現になることもあるけれども決して悪気はないということを重ねて言っときます。

3年目になりまして、なんとなく色んなことが分かってきまして、やっぱり繰り返しになる指摘があるなど。それは何回でも繰り返し指摘させていただきますので御勘弁ください。それと改善すべきところも僕の中でなんとなく見えてきたような気がして、そういうことを少しでも伝わるように評価していきたいと思ひています。

で、やっぱり一番外してはいけないところはセンターが県の組織であるということで、釈迦に説法であることは承知なんですけれども、県として、県の組織としてやるべきことはなんなのかというのをやっぱり最初から最後までそこは外してはならなくて、そこはチラチラと外れる感じがするんですね。そこを改めて県としてどうすべきなのか、県の組織としてどうすべきなのか、なにをしなければいけないのかということを変更して意識していただければいいかなと思ひます。

その他、繰り返しになることをちょこちょこ指摘させていただきますけれど、例えばコストの意識ですとか、そこは少し足りないな、なにかをするといったときに、いったいどれくらいコストが掛かって、どのくらいの経済的なメリットが想定されるのか、というところは全般的にやはり欠けている気はしています。後は、こまごまとしたところはそれぞれのところで、今日の課題の中でも指摘できると思うんですけども、後もう一個思い出しました。情報ですね。情報収集が少し足りないような気がしています、ずっと。新しいことをやるときに、いったいこのことは他の県ではどうなのか、国ではどうなのか、で県内ではどうなのか、あるいは、これが必要とされていることなのか、という情報収集がもうひとつ足りないような気がしています。改善されつつあるとは思ひますけれども、今日、前もって見させていただいて、頭をよぎったのはその3点ですね、県としてのこと、コストのこと、それから情報収集のこと、そのへんが繰り返しチラチラと気になっているところ です。そういったとこ

ろ中心に指摘していきたいと思いますが、繰り返しますけどなんとかお役に立ちたいと思ってやっていますので、そのへん御勘弁ください。あと形式的な会議にたくない、雰囲気もざっくばらんで結構ですので、説明者の方も気楽にで評価委員の皆様も気楽に意見が言えるように、我々が間違っていたら、間違っていると言っていたら結構ですので、なんとか気楽な感じで意味のある会議にしていきたいと思いますが、委員の皆様も皆さんもよろしくお祈りします。以上です。

(4) 出席者の紹介

加藤次長が出席者を紹介した。

(5) 議事

齋藤企画管理部長が、資料1に基づき、評価内容の概要等を説明した。

イ 研究課題（重点課題）の中間評価について

①放射性物質対策を講じた安全で高品質なきのこの生産技術の開発および県産きのこの母菌維持管理・劣化対策に関する研究

渡邊技師が資料2及び資料3により説明した。

補足として齋藤企画管理部長が資料4により説明した。

これに対する質疑・意見については次のとおりである。

陶山部会長

中身結構ばらばらなので分けていきましょう。一つずつやって最後に全体の分析のコメントがあればいただきたいと思います。

最初、一つめのハタケシメジの菌床ですか。海藻添加試験について、細かな質問でもいいですけど何か。

今回は予備的な試験という要素が強いと思うのですが。

鳥羽副部会長

測定1回しかまだできていないというお話でしたけれども、今年あと何回できる予定ですか。

渡邊技師

きのこの菌の塊を作るのに2ヶ月から3ヶ月かかりますし、そこからきのこを得るとなると、更に1ヶ月かかりますので、大体収量を取るまで3ヶ月から4ヶ月かかると思います。そこから、アミノ酸の分析を考えると、最高2回、試験研究期間に実施するのは難しいかと思っています。

陶山部会長

測定回数に関してなんですけど、今回予備的な感じなので測定1回だっているのは今日お話を聞いて理解できたんで、それはそれでいいんですけど。これ次ちゃんとしたデータ取ろうしたら、反復要るので、これ全部やらなくて良いと思うですね。折角予備試験やっているんで、この中でいけそうなものというか、必要なものだけに絞ったほうが楽になるので。

渡邊技師

例えば、9つの試験区の内、有用そうなものを絞ると…。

陶山部会長

そうです。

渡邊技師

ありがとうございます。

陶山部会長

絞り込みは御本人のさじ加減で全然結構だと思われるのですが、対照区と一番良いと思うものと後なんとなくのもの、そこは研究者としての判断で良いと思うので、この予備試験をうまく使っていただくと。一方で反復は絶対に必要なのでその数をなんとか多くして、きちっとしたデータを出すために全体の試験・作業を少なくするという工夫をしてください。

次は必ず統計的な処理を入れていただければと思います。お薦めとしては、やはり要らないものは無くして行って良いと思います。

最後の、放射性物質測定の部分、後から付け足したような感じがするのですが、これって結局菌床をつくる時にゼオライトが入って、中身が違うので、もしかしたら添加していることで全体が薄まっていることってないですか。

渡邊技師

その可能性もありますね。発表した順番とは逆になるのですが、この研究の流れとしては、そもそも研究当初は食の安全の追求、放射能対策という視点から始まりまして。放射能をいかに吸わせないというところに着目したものです。なので、試験区にゼオライトが入っているというのが低減効果というか汚染の低減を図れるのではないかという点で混ぜたものです。なので、試験開始と同時にかなり駆け足で始めたものなので、そういった要因というのめかなり含まれると思います。

陶山部会長

これ（放射能対策）はこの後もやる予定ですか。

渡邊技師

現行としてはですね、現在販売されているスギおが粉等については例えば今除いてあったとしても今放射性物質が飛散しているわけではないので、そこに関しての安全性というのは比較的担保されていますね。県外産のものを購入するですとか。そういった意味では研究課題化された当時は必須であった放射性物質対策ではありましたが、ここにウエイトを割くべきではないのかなと思っています。

陶山部会長

僕の印象もこれ要らないのではと。あんまりこういうこと言っちゃダメでしょうけど、変えてもらっても僕はかまわないと思います。

渡邊技師

ありがとうございます。

陶山部会長

御本人もコストの点とか課題とかしっかり認識されてらっしゃるので、このまま続けてもらって、絞るところは絞っていけば僕はいいではないかと思えますし、ちょっと素人的な感じではコストもうまくやればなんとかなるのではないかって気がするので、なるべく早めにそもそもコスト的に可能なのかどうかっていうのを見極めた上でやって欲しいということと、先ほどの、絞るところは絞っていただいて全然結構なので、これまでの経過を活かしてやっていただきたいと思います。

分散分析も、これ同時に全部測っちゃうんですかね。

渡邊技師

そうですね。

陶山部会長

まあでも、測るものは、要らないものは要らないので、一番みたいものだけを絞って、それで反復数を多くする形で、うまくやってもらいたい。

食味試験とか結構難しいなと思うので、ここは仕方ないかなという気がしますね。品質に差が無いという結果だけ出しておきさえすれば。食味に関して言えばアミノ酸が増えていても、直接分かるのか難しいところがあるので、やっていただくのは別にいいんですけど、差が無いからといって、全然卑下することはないと思います。

陶山部会長

次の課題にいきます。簡易施設の件ですけれども、全体的なところからいきますけど、そもそもどれくらいの収入を想定しているんですかね。ハウスが空いているときに栽培させて、秋から冬にきのこ作ろうという感じ。

渡邊技師

要望をされている生産者の方としては、通常はえのきたけを栽培している方なんですけれど、発生する環境をかなり整えておきまして、そういった意味では将来的に大規模生産も見込める環境ではあります。ただ、ハタケシメジ自体が現在大量生産に向かないですし、大量生産に乗ると価格面で低迷という問題が出てしまいますので、例えばスーパーでブナシメジの脇で200円で売っても100円のブナシメジを手にとってしまう人がかなりいらっしゃると思うんですよ。きのこの外見上もかなり似通っているものなので。それより野性味あふれるきのことして、たとえば道の駅でのパック販売ですとか、そういった意味での天然物であるなら道の駅なら300円、400円のきのこでも買おうかなというのもあるので、そういった栽培をベースに考えるべきかなと考えています。

陶山部会長

なんとなく全体のイメージとして、ハウスが空いている時に栽培してちょっと収入にプラスしたいというようなイメージだと思うんですけど、その金額はだいたい普通の農家さんで、どのくらいの収入でどのくらいの金額を想定しているのかっていうのをちょっと言っただけで。今じゃなくていいので、そういうのがあるとどれくらいのお金が掛けられるかっていう計算にもなるし、どれくらいやる気になるかって計算にもなるので、その辺コストっていつてらっしゃるので、その辺もどれくらいの全体像、平均的な農家さん、このシステムを導入しようとする農家さんで、どのくらいの農家さんを想定しているのかってことを最終的に言っただけでいいと思います。

渡邊技師

そこまでまだ検討に入っていないので、検討したいと思います。

陶山部会長

それと、ぼくちょっと分からないんですけど、こういう栽培って企業さんとか・・・他の県ではやってないんですか。

渡邊技師

野外栽培ですとか、野外で栽培する時どういふものを被せればきのこが出るのかっていう研究事例はかなり探してきたんですけど、栽培時期を天然物とずらして金掛けないで採れる方法はないのかっていうのはな

かなか掘り下げられてなくて。

陶山部会長

このハウスを使ってっていうのか、育苗ハウスを使ってっていう事例はあまりない。

渡邊技師

ハウスというよりは、野外栽培の工夫が他の県での研究ではメインですね。販売時期をずらすというのはなかなか掘り下げられていないので、そこに活路はあるのかなと。

陶山部会長

なるほど、前例がないと考える。

渡邊技師

そうですね。表土被覆材を検討することでちょっと促成栽培，抑制栽培的に栽培期間をちょっとずつずらせないかという研究をしている県はあります。

陶山部会長

これも、最終的な報告の時にほかにはないんだということを事実とすれば、それも言うだけだと素人的にはわかりやすい。で、もしあるんだったら、他ではどのくらいやられているのか、どこがやられてないのかっていうところまで説明していただくと良いと思います。

これ良くなって思ったのが、最初に僕が言いました県でやるべきこととして、研究結果がまとまってきて、地域の環境とすごくリンクすれば、この地域では可能だけど、ここではだめとか、地域性がすごく出る可能性があって、宮城県のどのあたりの気温のところのハウスを想定して、っていうふうに絞っていくと、センターでやる価値が出てくると思うので、そういったつもりで多少絞り込んで考えてもいいのかなと思いました。

渡邊技師

普及地域の絞り込みということですか。

陶山部会長

そうですね。そこちょっと微妙なんですけどね。県としてやっているの、一地域のものだけってなると反発も出るの、どうかとも思うんですけど、少なくとも県の気候に合わせた、特化させた方法という風に考えれば、センターでやる価値は十分あるので。他の県ではできないことです。それは。全国でもできないことです。そういった視点でやっていただければ良いかなと思いました。

やられていないのであれば、残りの時間で頑張ればもしかしたら良い結果は出るのかもなと僕は期待感を持って聞かせてもらいました。

僕は世の中の的にいったいどれくらいのことがやられているのか分からないんですけど、もし今言われたようにやられていないのであれば、色々試してみると良いと思います。で、やっぱり忘れていけないのが、コスト感ですよ。いったいどれくらい稼ごうとして、どれくらい掛けられてというところは必ず意識していただきたいと思います。1kgとか出てきましたけど採算ラインとしてはどれくらいなのか、ちょっと分からないので、そういったことも今じゃなくて良いですけども、整理していただくと良いと思います。

渡邊技師	最終的には採算ラインっていうのが普及に関して一番大事な情報となるかと思うので、そこまで含めて検討するようにします。
陶山部会長	むしろ、だから、最初からそれを目標にしてしまうといいんですよね。
渡邊技師	何グラムを超えるために・・・
陶山部会長	これぐらいにならないともものになりませんよと。というところでそのためにはどうすればいいかという開発の仕方もありかなと思います。
大沼委員	それに関連するんですけど、震災後と震災前と状況違うと思うんですが、きのこ類って全国で4000億円となっていますが、そもそも宮城県では実際のきのこの生産金額っていうのはどれくらい今あって、震災前ではどれくらいだったのか。
眞田リーダー	金額はですね。40億円くらいです。キロ数にしますとだいたい7000トン近いです。ムラサキシメジもシイタケも全部入っているものです。
大沼委員	その中でシメジ類の割合っていうのはどのくらいのものですか。
渡邊技師	これ自体は統計上「その他のきのこ」で入っているので、パーセンテージとしてはかなり低くなっていますね。なので、その中でいかにパイを広げられるかっていうのが課題でして、それですと単純に空調栽培だけではなく、外でやる方法はないのかとか、ビニールハウスで栽培時期ずらして増やせないのかとか、常に色々な方法を検討すべきではありますね。
大沼委員	一般の農家で生産するきのこ企業、事業体で生産するきのこの割合ってどうなんですか。
渡邊技師	現行でハタケシメジについては、調環境で栽培されているのは大和町の一カ所で栽培されていまして、逆に野外での栽培方法っていうのは独自のノウハウがあるので、なかなかおっぴらにならないですけども、100個単位で購入する個人の方もいらっしゃるんですね。そういった意味で空調栽培を推し進めるという方法もありますし、外で栽培とかビニールハウスを使ってこのくらい簡単にできるんですよと、新しい栽培方法の提供っていうのは、ハタケシメジの栽培全体のパイを広げることになるのかなと思っています。
大沼委員	陶山先生おっしゃられるように、対象者を絞り込んでいくっていうのは非常に大切だと思います。ムラサキシメジの菌床の農家への提供の割合というのはどうなのでしょう。
渡邊技師	ムラサキシメジについては、基本的に購入される方というのは業者さんではなく一般の個人の方ですね。自分の山林とかをうまく使って栽培

している方で。事故前は1万数千個の菌床の実績があったんですけども、出荷自粛が昨年度まで行われていたので昨年度、栽培を再開した段階では菌床の販売数は一千個を切っています。

眞田リーダー

震災前はムラサキシメジの需要者は200から300の個人・団体がありました。震災後は出荷制限、自粛になったということもありまして、かなり減ってきてはいるんですけども早く生産開始したいという声も聞こえてきています。

陶山部会長

個人の方が作って、個人の方が売っているということですか。

眞田リーダー

そうですね。個人の方が作って、道の駅等で売っている。あるいは震災前は、高級旅館などに売り込みをかけた経緯があって、使ってもらっていたんですね。一の坊とか、一応高評価は得られました。手に入りにくいムラサキシメジの場合ですけれども、季節性があって特異なきのこだと言われたことはあります。

陶山部会長

全体に関わることなので最後に聞こうと思っていたことですが、菌床はセンターの売り上げになってくるわけですよ。

渡邊技師

原種菌を使用の許諾契約を結んでいる食菌メーカーさんに販売する形なんですけれども、現段階ではハタケシメジが広まっていない段階で、普及に貢献していただいているということで、減免でお金は取っていません。

陶山部会長

1万数千個というのはそこから出ていると。

渡邊技師

そうですね。菌の塊を基に、広がっていきますので。

陶山部会長

ハタケシメジの方は。世知辛い話で申し訳ないんですけど、他の研究センターの話だとそのセンターの予算の話になって、一応こういうのも分かってなきやいけないと思うんですけど、このセンターとしての儲けとしては。

渡邊技師

ムラサキシメジ、ハタケシメジ共に現在は価格をつけていない段階です。震災以前はムラサキシメジは価格をという話もありましたけれども、現段階ではまず普及を、広げることを優先的に考えています。

陶山部会長

将来的には、収入に結びつくということもあり得る。

渡邊技師

そうですね。

陶山部会長

分かりました。

陶山部会長

僕の印象としましても、問題点も分かっているように感じますし、次回、最終的な報告の時には周辺情報も付けていただくとともに、もっと分かり



やすいと思うので、それと、今の僕の理解が正しければ可能性はあるように思えます。続けていただいて、もしかしたら、良い成果が上がるのではないかと期待しています。

渡邊技師

ありがとうございます。

陶山部会長

3番目のYBLB法なんですけれども、あの、駄目でしたということで、試験中止ということで私は構わないと思うんですが、皆さんも大丈夫ですよ。どうしても代替りのものをやらなければいけないかという僕はそうではないと思うんですけれど、優良菌株の掘り起こしをされるということで、それはそれで結構なことなんですけれど、無理矢理にしないで良いと思うんですよ。言い方が悪いですけど、これはもうおまかせします。

渡邊技師

生産する管理者側からすれば、技術開発というのは継承できなければ自分たちが困ってしまう問題なので、やはり突き詰めていきたいところはあるまして、今回まずは保存しているものの中から、良いものをいかに発掘できるのか、研究というよりは作業的な面が含まれていますけれども、取り組んでいきたいと考えています。

陶山部会長

YBLBについてはいいですかね。

では、最後、ムラサキシメジの栽培試験について、なにかございませうでしょうか。

陶山部会長

僕まだ理解できていないかも知れないですけども、2年目以降って非常に心配ですよ。今、1年目については大丈夫ですよと言ってしまっていて、2年目以降はやらないでくださいとしても、まあ、やりますよね。それって責任持てないので、ちょっと危ないと思うんですけども、僕、これ非常に心配しています。理屈はよく分からないですけど、かなり確実に2年目以降はまずいと。

渡邊技師

この原因については、まだ意見が分かれるところではあるんですけども、ひとつの原因としては、例えば、下にバーク堆肥を敷いてその上に菌を置いて、落ち葉を被せてっていう栽培方法なんですね。その菌の塊から出てきた菌糸が周りの落ち葉を取り込んできのこが出るんですけども、1年目でその栄養を食い尽くしてしまうので、周りに菌糸が次の年、広がるんですよ。そうなるとバーク堆肥を越えて野生のというか、周りの天然環境のものを取り込んでしまった時に、もしかしたらセシウムを集めてしまうのかとか、様々な検討があります。確かに1年目しかだめだよと言っていても、2年目に出てきた綺麗なきのこを、2年目だって分からないですし、そういった面では注意喚起は徹底的にしますし、2年目以降が本当に危ないんだよという情報提供と、こうすれば低減化につながりますよという技術開発的な面での調査っていうのを定期的に果たしていかないといけないかなと思います。

陶山部会長

そう考えると、条件によって全然数値が変わってきちゃうと思っちゃ

いますよね。なので、どういう条件下ではこうなったっていう、これは登米のバーク堆肥を基にしてるものですか。

渡邊技師

そうです。

陶山部会長

登米のバーク堆肥そのものの数値が無いとやっぱり……。もともとの値がこれくらいのもを使ってということを押さえれば一般化はできるので、可能性はあるので、データは必ず取っておいてください。

渡邊技師

伏せ込みの際のバーク堆肥の濃度は毎回データを取っておりまして、県内産のバーク堆肥の濃度自体も年々減少はしているんですけども、元の資材の濃度が幾らでそこから出たきのこが幾らなのかというデータを提供しないことには。

陶山部会長

そもそも、材料となり得るバーク堆肥のバラつきもあるでしょうから、それもやっぱり把握していただけると良いと思います。

陶山部会長

全体でもいいですし、それぞれのことでいいですので、なにかございますでしょうか。

全体として、最初聞いていて良いなと思ったのは、やはり、消費者の方、生産者の方々からの相談を基にして始めているところが非常に良いなと。

それ、上手くまとめられないかなと思いました。県民の声を反映させてこうやっているんですよと表現すると、外部的には非常に説明としては上手くいくので。定量的になると無理だと思いますが、実際にこういう意見があって、それに対してこうしているんだってことを目に見える形にいただけると・・・難しいですかね。

大沼委員

ホームページに載せていますよね。ハタケシメジとか。あれに食べた人の意見を載せるとか、うちなんかも住宅やってお客さんの声とかそういったものを載せていくと信用性が増すというか。

陶山部会長

それに対応してこうやっていますよとか、だと非常に印象は良いですよ。そこを、ちょっと難しいですけども今挙げたものだけでも構わないと思います。生産者の声とか消費者の声とか具体的な事例を書いておくだけでも良いかもしれません。

渡邊技師

県民の方々の、御相談ですとか御意見ですとかは相談対応記録としてまとめているものがあるので、例えばその中でこういったものに対応し、こういったきのこが生まれましたというストーリーを作ると分かりやすいということですね。

陶山部会長

そうですね。それと、冒頭でお話ししましたようになんでこのセンターでやっているのかということのひとつとして今回の場合は、ここで作った2つの品種なので、これも十分に理由が通っていて、これに関しては他の県ではやりようがないので、独自性みたいなものがあると思うの

で、条件とか。そういったものにちゃんと対応していくと、これをちゃんと売れるものにしていくと、全体として非常に理由が通っているので、そういう意味では、全体として大丈夫かなと思いました。後は、コストのところですね。御自身が意識されているので大丈夫だとは思いますが、40億円の中のごく一部だと。これも世知辛い話ですけど、そのうちのどのくらいを食っていくんだというか、どのくらい上げようとしているのかっていう大雑把な規模感というんですかね。それってやっぱり重要なので、下手するとたったそれだけって言われちゃうかもしれないですが、いったいどれくらいを目指しているのかと。そう考えると、例えば県の全体の農業生産の中のどれくらいのパーセンテージになるのかってのを御自身でも分かっていると、どれくらいの貢献をしようとしているのかっていうのがはっきりするので、その計算もしていただくと。報告書も県の数字を使って書いていただくと。

大沼委員

県の方針があって、県の研究機関ではこうやっているという流れなんですよ。

陶山部会長

その他なにかありますか。逆に県のほうからそこは違うとかあれば。

渡邊技師

客観的な御意見いただくと研究の掘り下げにもなるので、忌憚ない御意見ありがとうございます。

#### ロ 報告事項

##### ①平成28年度終了課題に係る内部評価結果について

齋藤企画管理部長が、資料5及び資料6により、終了課題の内部評価結果について説明した。

質疑応答はなかった。

##### ②平成30年度以降課題化候補の調整結果について

齋藤企画管理部長が、資料7により、課題化候補の調整結果について説明した。

質疑応答はなかった。

#### (ハ) その他

評価基準の変更について

齋藤企画管理部長が資料8により評価基準の変更について説明した。

平成30年度の第1回目の評価部会の終了課題の評価から変更後の評価基準を適用することで委員の了承を得た。

#### (6) 閉会あいさつ(鳥羽副部会長)

今日はおいしいきのこも頂きまして、食べたことのあるほうがなにか言いやすいかなという気はしておりましたので、食べられて良かったです。それはさておき、細かいことが多かったかなとは思いますが、陶山先生のほうにコメントをおまかせしてしまって、今日はあまり貢献できず、申し訳なかったです。

中間報告ということなので、これから先というか後半戦を頑張っていただきたいと思います。研究内容的にはとても楽しみな、最後の報告も楽しみなものになっていると思います。これから、まだどんどん出てくると思いますので引き続きよろしくお願ひします。